

Title	Pyridopyrimidine系合成抗菌剤piromidic acidおよびpiromidic acidの抗菌作用機序
Author(s)	中村, 信一
Citation	大阪大学, 1977, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31687
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・(本籍)	中村信一
学位の種類	薬学博士
学位記番号	第 3846 号
学位授与の日付	昭和 52 年 3 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	Pyridopyrimidine 系合成抗菌剤 piromidic acid および pipemidic acid の抗菌作用機序
論文審査委員	(主査) 教授 青沼 繁 (副査) 教授 上原喜八郎 教授 岩田平太郎 教授 三浦 喜温

論 文 内 容 の 要 旨

緒 論

Piromidic acid¹⁾ (以下 PA と略) は 1971 年南らにより, また Pipemidic acid²⁾ (以下 PPA と略) は 1975 年松本らにより合成された pyridopyrimidine 系抗菌剤で Fig. 1 に示すような化学構造を有している。それらの化学構造は 1962 年 Lesher らにより報告された主としてグラム陰性菌に有効な naphthylidene 系化合物 nalidixic acid³⁾ (以下 NA と略) と類似している。PA および PPA の抗菌

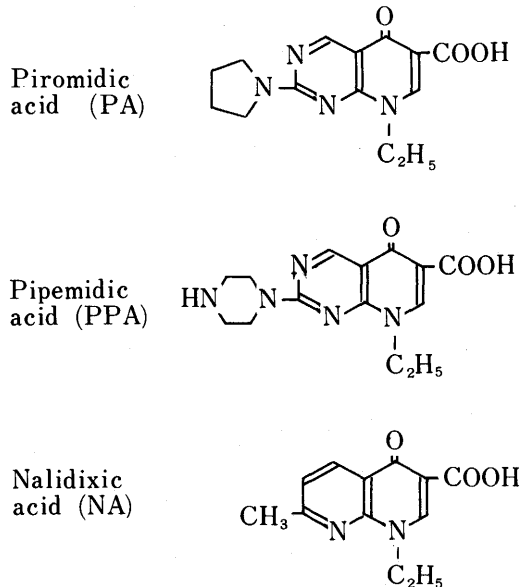


Fig. 1. Chemical structures of piromidic, pipemidic and nalidixic acids.

作用は多くの点でNAと類似しているが、前者はブドウ球菌に、後者は緑膿菌にもある程度の抗菌作用を示す点^{4,5)}でNAとは異なる性質を有している。またPAとNAとの間にはほぼ完全な交差耐性が認められるが、PPAとNA間の交差耐性は不完全である⁵⁾。

NAの抗菌作用機序に関してはこれ迄にかなりの研究が行なわれており、NAが細菌DNAの合成を特異的に阻害すること^{6,7,8)}が明らかにされているが、その分子レベルでの阻害機構は未だに明らかではない。

PAおよびPPAがNAと同様の作用機序を示すか否か、またPPAとPAまたはNA間に何故不完全交差耐性が認められるのかを明らかにする為、主として大腸菌を用いて作用機序ならびに耐性機序の検討を行なった。

本 論

1. Piromidic acid と pipemidic acid の抗菌作用

PAおよびPPAの抗菌作用を類縁化合物NAと比較して調べたところ、これらの抗菌スペクトルは互に類似しており、主としてグラム陰性菌に強い抗菌作用を示した(Table 1)。しかしPAが黄色ブドウ球菌に、PPAが緑膿菌に比較的強い抗菌作用を示す点NAとは異なる性質であった。

Table 1. Antibacterial spectrum of piromidic, pipemidic and nalidixic acids.

Organism	MIC ($\mu\text{g}/\text{ml}$)		
	PPA	PA	NA
<i>Staphylococcus aureus</i> Terajima	25	12.5	100
<i>Staphylococcus aureus</i> 209P, JC-1	12.5	12.5	100
<i>Staphylococcus aureus</i> No. 50774	25	12.5	50
<i>Bacillus subtilis</i> PCI 219	6.25	3.13	6.25
<i>Corynebacterium pyogenes</i> C-21	25	50	400
<i>Erysipelothrix rhusiopathiae</i> Agata	100	200	400
<i>Streptococcus hemolyticus</i> A65	200	400	400
<i>Diplococcus pneumoniae</i> I Neufeld	200	>400	>400
<i>Listeria monocytogenes</i> LI-2402	200	>400	>400
<i>Escherichia coli</i> K-12	1.56	3.13	3.13
<i>Escherichia coli</i> NIHJ, JC-2	1.56	25	12.5
<i>Escherichia coli</i> var. <i>communis</i>	3.13	12.5	3.13
<i>Shigella flexneria</i> 2a FW10	3.13	25	6.25
<i>Shigella sonnei</i> EW33	1.56	6.25	3.13
<i>Salmonella enteritidis</i> No. 1891	1.56	6.25	3.13
<i>Salmonella typhimurium</i> S-9	3.13	12.5	3.13
<i>Klebsiella pneumoniae</i> No. 13	6.25	50	12.5
<i>Proteus vulgaris</i> OX ₁₉	6.25	6.25	6.25
<i>Proteus morganii</i> Kono	3.13	25	6.25
<i>Vibrio parahaemolyticus</i> S-1	3.13	3.13	1.56
<i>Serratia marcescens</i> X100	6.25	50	12.5
<i>Pseudomonas aeruginosa</i> Tsuchijima	12.5	100	100
<i>Pseudomonas aeruginosa</i> No. 12	25	200	100
<i>Neisseria meningitidis</i> Osa	1.56	1.56	3.13
<i>Haemophilus influenzae</i> Shiga	1.56	1.56	1.56
<i>Yersinia enterocolitica</i> MY-79	1.56	6.25	1.56
<i>Pasteurella multocida</i> M-17	1.56	0.78	1.56
<i>Brucella abortus</i> Kusayanagi	200	>400	>400

PA, PPAおよびNAと抗生物質との間には交差耐性は見られなかったが、前三者間には交差耐性が認められた。しかしPPAとPAまたはNAとの交差耐性は不完全であり、PPAはPAおよびNA高度耐性菌にもある程度の抗菌作用を示した (Table 2)。

Table 2. Antibacterial activity of piromidic and pipemidic acids against bacteria resistant to nalidixic acid.

Organism	MIC ($\mu\text{g}/\text{m}\ell$)		
	PPA	PA	NA
<i>E. coli</i>			
P-84	25	>400	>400
P-174	25	>400	>400
P-184	25	>400	>400
P-233	25	>400	>400
P-244	25	>400	>400
P-307	25	>400	>400
P-447	25	>400	400
P-509	50	>400	>400
P-1196b	25	>400	400
P-1297	25	>400	400
P-1324	50	>400	>400
P-1344	12.5	>400	100
P-1350	12.5	>200	100
P-1352	12.5	>400	100
P-1369	25	>400	400
P-1589	25	>400	400
P-1599	25	>400	400
P-1767a	25	>400	200
P-2049	50	>400	>400
P-2050	12.5	>400	200
<i>K. pneumoniae</i>		>	
P-256	100	>400	>400
P-1280	25	>400	100
P-1299	50	>400	>400
P-1301	100	>400	>400
P-1312	50	>400	400
P-1851b	25	>400	200
<i>P. mirabilis</i>			
P-287	12.5	>400	>400
P-334	12.5	>400	>400
<i>P. morganii</i>			
P-114	25	>400	>400
P-1334	6.25	>400	100
<i>P. rettgeri</i>			
P-438	12.5	>400	400
P-1335	100	>400	400
P-1545	50	>400	200
<i>P. vulgaris</i>			
P-1108b	200	>400	>400
<i>S. sonnei</i>			
P-1167	25	>400	400
P-1168	25	>400	400
P-1169	25	>400	400
P-1170	25	>400	400
P-1171	25	>400	400
P-1179	100	>400	>400

2. Piromidic acid と pipemidic acid の抗菌作用機序

PA および PPA を MIC 近辺の濃度で大腸菌に作用させると、生菌数は殆んど増加しないかあるいは減少するのにも、濁度は増加し続けた (Fig. 2)。

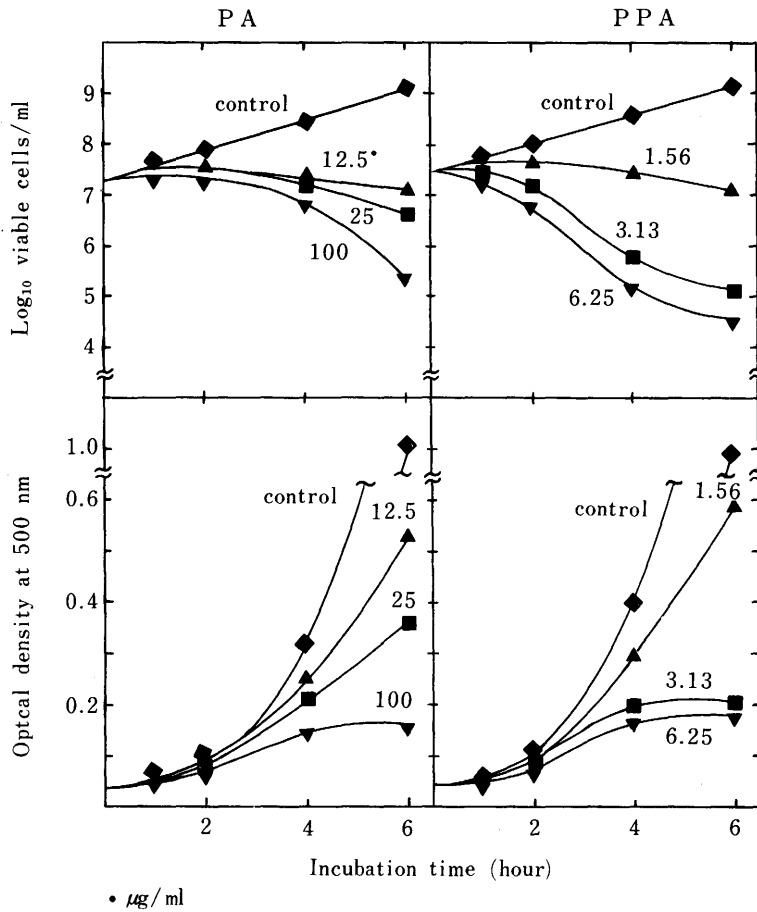


Fig. 2. Effect of piromidic and pipemidic acids on the growth of *E. coli* JG181-1.

経時的位相差顕微鏡観察では PA および PPA の作用により菌の細胞分裂は阻害されたが、伸長は殆んど抑制されず、結果として菌は長くフィラメント状になった (Photo 1, 2)。

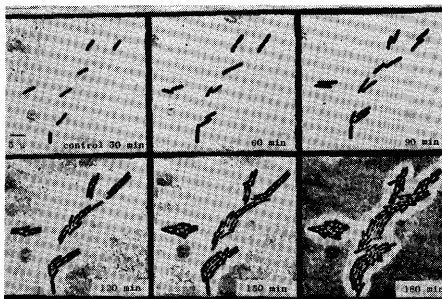


Photo 1. Phase-contrast micrographs of *E. coli* JG181-1 grown normally.

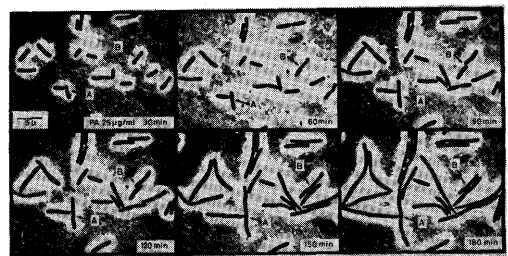


Photo 2. Phase-contrast micrographs of *E. coli* JG181-1 grown in the presence of 25 µg of piromidic acid per ml.

このようなフィラメント状の菌に浸透圧ショックを与えても菌は死滅しなかった。菌体高分子の化学的定量では、PAおよびPPAはMIC前後の濃度で、DNA量の増加を特異的に抑制した。また¹⁴C-thymidine, ¹⁴C-uridineおよび¹⁴C-L-histidineのトリクロール醋酸不溶分画への取り込み実験では、PAおよびPPAはMICの近辺で¹⁴C-thymidineの取り込みのみを阻害した(Fig. 3)。あらかじめ³H-thymineでDNAを標識した大腸菌にPAまたはPPAを作用させると、1~2時間のlagの後、DNAの分解が誘導されたが、少なくとも1時間以内はそのような分解は認められなかったので、¹⁴C-thymidineの取り込み阻害はDNAの分解促進によるのではなく合成阻害によると考えられる。

PAおよびPPAによるDNA合成阻害作用はpolA1変異株においても認められたことから、DNAポリメラーゼ1以外の酵素によるDNA合成がこれらの薬剤により阻害されると考えられる。またセロファン膜法によるin vitro DNA合成系においてdXTPからDNAへの反応が阻害されたことから、これらの薬剤はDNAの前駆体合成を阻害するのではなく、DNAポリメリゼーション過程を阻害すると考えられる。Chloramphenicol処理またはL-histidine飢餓により作製した同調DNA合成系において、PAはDNA合成の開始を阻害しなかったが、開始後の複製反応を速やかに阻害した(Fig. 4)。

またPAおよびPPAによるDNA合成阻害作用は可逆的で、薬剤を除去するとDNA合成は速やかに回復した(Fig. 5, PPAの図は省略)。

このようなPAおよびPPAによるDNA合成阻害作用の性質はNAで既に明らかにされている性

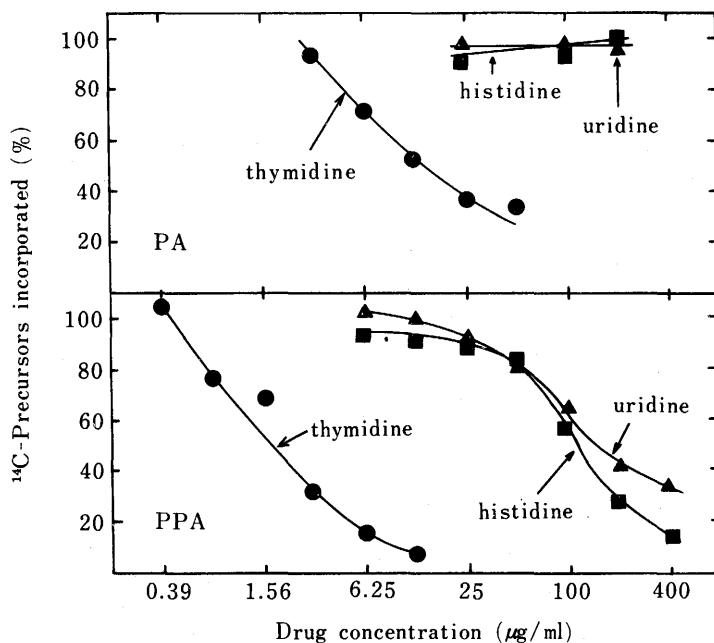


Fig. 3. Effect of piromidic and pipemicic acids on the incorporation of ¹⁴C-thymidine, ¹⁴C-uridine and ¹⁴C-L-histidine into an acid-insoluble fraction in *E. coli* JG181-1.

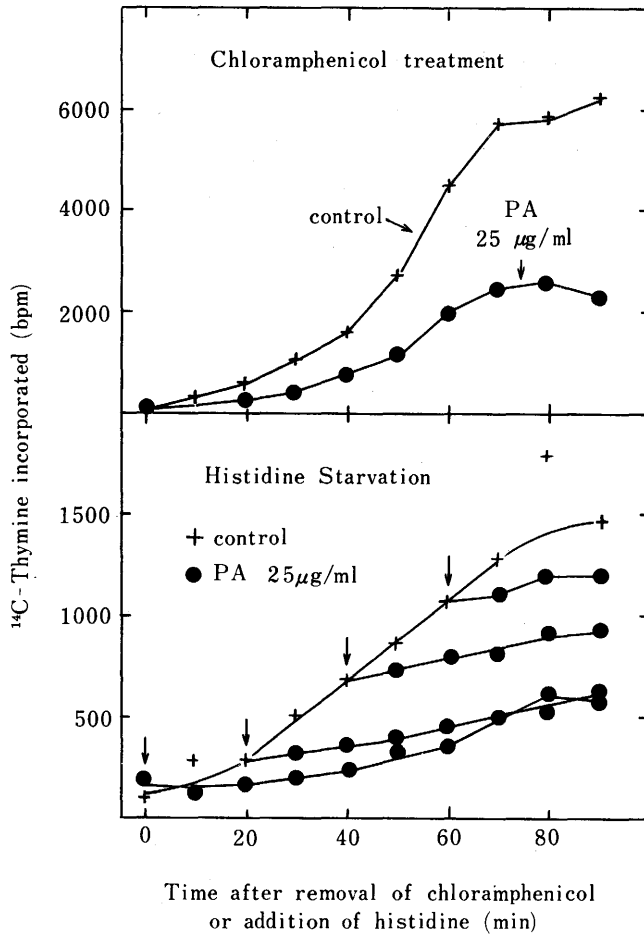


Fig. 4. Effect of piromidic acid on the initiation-aligned DNA synthesis in *E. coli* JG181-1.

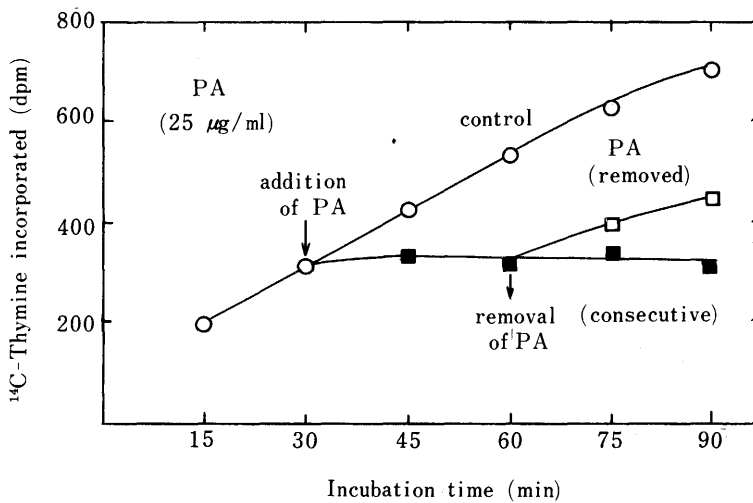


Fig. 5. Recovery from the inhibition of DNA synthesis upon removal of piromidic acid.

質^{9,10}) と殆んど同じである。

PAおよびPPAによるDNA合成阻害の程度を見ると、MIC近くの濃度ではDNA合成は完全には停止していない。その条件下で菌の細胞分裂はかなり長時間にわたり、ほぼ完全に阻害される。従ってこれらの薬剤による細胞分裂の阻害はDNAが合成されない為に起るのではなく、合成されるDNAが異常な為、量的に十分なDNAが合成されても細胞分裂が起らないものと思われる。PAおよびPPAを作用させた菌の核を電子顕微鏡で観察すると、細胞分裂が阻止され、フィラメント状になった菌体の中央部に異常に大きな核が通常1個認められた。また核は薬剤の作用時間が長くなるにつれ次第に大きくなる傾向を示した(Photo 3, 4)。このような結果はPAおよびPPAの作用下においても核物質の合成がある程度進行していることおよび合成された核物質は正常に分裂することができないことを示している。

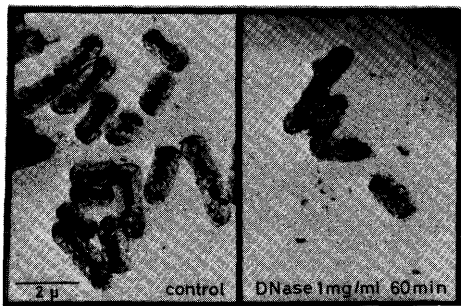


Photo 3. Electron micrographs of *E. coli* JG181-1 (left; normal cells, right: normal cells treated with deoxyribonuclease, whose nuclei disappear).

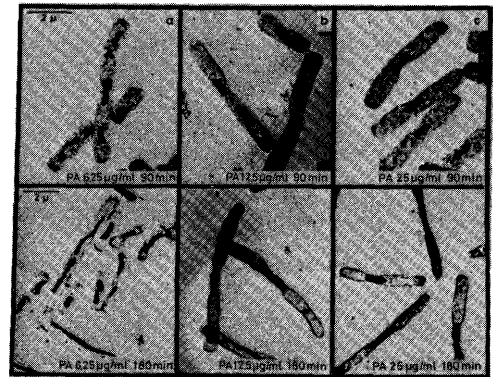


Photo 4. Electron micrographs of *E. coli* JG181-1 grown in the presence of piromidic acid.

以上の実験結果よりPAおよびPPAは細菌の核の複製を阻害すると共に核に異常をひき起し、その為核分裂ならびに細胞分裂を阻害すると考えられる。

3. Piromidic acid と pipemidic acid の耐性機序

PAおよびPPA耐性菌は低頻度ではあるが臨床分離株中より見出されている⁵⁾。これら耐性菌のPPA耐性の伝達を混合培養により調べたが伝達の認められる菌株を見出すことは出来なかった。薬剤不活性化酵素の有無についても生物学的定量法ならびにラジオクロマトグラフィーで調べたが、PAまたはPPAを明らかに不活化する菌株は見出せなかった。菌体と結合する¹⁴C-PAまたは¹⁴C-PPAの量は感受性菌と耐性菌でほぼ同程度で、その大部分は洗滌により容易に除去された。しかし耐性菌ではDNA合成系のPAおよびPPAに対する感受性が低下していた(Table 3)。このようなDNA合成系の感受性低下はintact cellのみならずcell lysateの場合にも認められたので、DNA合成系自体の変化によると考えられる。PAのDNA合成阻害濃度はcell lysateに比しintact cellではかなり高かったので、この薬剤の作用部位への移行性は不良と考えられる。従ってPA耐性はDNA合成系の感受性低下と薬剤の作用部位への移行性不良によりひき起されていると思われる。これ

に対し PPA の DNA 合成阻害濃度は cell lysate と intact cell でほぼ等しかったので、この薬剤の作用部位への移行性は良好と考えられる。従って PPA 耐性は DNA 合成系の感受性低下によるのみ支配されていると推定される。このような作用部位への移行性の差が両剤間の抗菌力の差ならびに不完全交差耐性発現の機序と思われる。

Table 3. Comparison of the inhibition of DNA synthesis in the intact cell and lysate systems of pyrimidic acid-sensitive and -resistant bacteria.

Drug	Organism	MIC ($\mu\text{g}/\text{ml}$)	ID ₅₀ ($\mu\text{g}/\text{ml}$)		Intact cell Lysate
			Intact cell	Lysate	
PPA	E. coli JG 181-1 PA-s	1.56	1.99	1.73	1.15
	E. coli JG 181-1 PA-r (made in vitro)	25	37.9	15.4	2.46
	E. coli P-174 PA-r (clinical isolate)	25	45.1	50.0	0.90
PA	E. coli JG 181-1 PA-s	25	13.4	0.84	16.0
	E. coli JG 181-1 PA-r (made in vitro)	>400	93.3	5.24	17.8
	E. coli P-174 PA-r (clinical isolate)	>400	>400	137	> 2.9

ID₅₀ : 50% inhibitory dose of DNA synthesis

結 論

Pyridopyrimidine 系合成抗菌剤 PA および PPA は類縁化合物 NA と同様、主としてグラム陰性菌に抗菌作用を示したが、NA とは異なり、PA はブドウ球菌に、PPA は緑膿菌に比較し強い抗菌作用を示した。これら三剤間には交差耐性が認められたが、PPA と他の二剤間の交差耐性は不完全であった。

PA および PPA は MIC 近辺の濃度において大腸菌の細胞分裂を阻害したが、伸長は阻害せず、その条件下で DNA 合成のみが特異的に抑制された。阻害されるのは DNA の複製過程で、その阻害は可逆的かつ不完全であった。電子顕微鏡観察では PA および PPA は核の複製異常をひき起し核分裂を阻害した。

臨床分離の PA および PPA 耐性菌の中には PPA 耐性を伝達する菌株やこれらの薬剤を不活化する菌株は認められなかった。しかし耐性菌では DNA 合成系の両剤に対する感受性が低下していた。薬剤の作用部位への移行性は PA では不良で、PPA では良好であった。

参考文献

- 1) S. Minami, T. Shono, and J. Matsumoto, Chem. Pharm. Bull., 19, 1426 (1971).
- 2) J. Matsumoto, and S. Minami, J. Med. Chem., 18, 74 (1975).
- 3) G. Y. Leshner, E. J. Froelich, M. D. Gruett, J. H. Bailey, and R. P. Brundage, J. Med. Pharm. Chem., 5, 1063 (1962).

- 4) M. Shimizu, S. Nakamura, and Y. Takase, *Antimicrob. Agents Chemother.*, 1970, 117 (1971).
- 5) M. Shimizu, Y. Takase, S. Nakamura, H. Katae, A. Minami, K. Nakata, S. Inoue, M. Ishiyama and Y. Kubo, *Antimicrob. Agents Chemother.*, 8, 132 (1975).
- 6) W. A. Goss, W. H. Deitz, and T. M. Cook, *J. Bacteriol.*, 88, 1112 (1964).
- 7) W. A. Goss, T. M. Cook, and W. H. Deitz, *J. Bacteriol.*, 89, 1068 (1965).
- 8) T. M. Cook, K. G. Broun, J. V. Boyle, and W. A. Goss, *J. Bacteriol.*, 92, 1510 (1966).
- 9) A. M. Pedrini, G. C. F. Pedrali-noy, and A. Falaschi, *Progress in Chemotherapy, Proceeding of 8th International Congress of Chemotherapy*, ed. by G. K. Daikos, Vol. 1, p. 432-435 (1974). Hellenic Society of Chemotherapy Athens, Hellas.
- 10) W. H. Deitz, T. M. Cook, and W. A. Goss, *J. Bacteriol.*, 91, 768 (1966).

論文の審査結果の要旨

Pyridopyrimidine系合成抗菌剤としてグラム陰性菌に有効な pipemidic acid を合成し、その作用機序ならびに耐性機序を解明した。すなわち大腸菌の細胞分裂を阻害し、伸長は阻害せず、DNA合成のみが特異的に抑制された。 $-N-C_2H_5$ 及び $-COOH$ が必要で、それらの誘導体はすべて pipemidic acid におよばないことも認められた。

よって学位論文に価するものと信ずる。